

## 韓国語における三子音の法則 ——フランス語を通して見た韓国語

田 川 光 照

### 要 旨

韓国語は日本語話者にとって学習しやすい言語である。文法面では類似した点が多く、とりわけ語順は日本語とほとんど同じだからである。しかし、発音面では大きな違いがあり、日本語話者が韓国を学習する際に最も難しく思うことの一つがその点にあるであろう。本稿では、とくに音節末の複子音字 (ㄷㅂㅅ) に焦点を当て、フランス語文法でいう「三子音の法則」の概念を援用してその読み方について考察する。用言の語幹や体言のㄷㅂㅅの読み方は、語尾や助詞が後続する場合、すべての字母を発音すると子音（文字ではなく音）が三つ連続することになれば、ㄷㅂㅅにある二つの子音字のうちひとつが発音されないと見なすことができる。なお体言の場合、助詞がつかずに単独で用いられる時にも一つが発音されないが、それは後続する単語が子音で始まったとしても子音が三つ連続することをあらかじめ防止しているのであると見ることができる。結局のところ、韓国語は子音が三つ連続することを徹底的に避けている言語であり、三子音の法則が貫徹した言語である。

キーワード：韓国語 フランス語 発音 三子音の法則 ㄷㅂㅅ

## はじめに

韓国語とフランス語は言うまでもなくまったく異なる言語である。系統が異なるだけでなく、たとえば英語とフランス語の間に見られるような、隣接した言語間での影響関係もない。あるとすれば、フランス語の単語のごく一部が外来語として現代韓国語のなかに入っている程度のものである。しかし、興味深いことに発音面、あるいは綴り字と発音の関係のなかには共通する点がまま見られる。フランス語を専門とする者が韓国語を学習する時、最初に興味を引かれるのはこのことであろう。

簡単な例を挙げることにする。韓国語の綴り字 ㅏ は ㅏ と ㅣ が合成されたものであり、アルファベットの ai に相当する。ところで、韓国語の ㅏ もフランス語の ai も、ともに [ɛ] の音を表しているのである。これは、[a] と [i] の音の連続が [ɛ] となる現象が特殊なものでないことを示していると言えるだろう<sup>1</sup>。もう一つ例を挙げる。韓国語の綴り字 ㅓ は ㅓ と ㅣ の合成で [e] の音を表し、ㅓ は ㅓ と ㅣ の合成で [we] の音を表す。これらはともにアルファベットの oi に当たるが、この綴り字のフランス語の読みは [wa] である。しかし、このフランス語の読みは比較的新しいもので、歴史的には次のような変遷をたどっている。すなわち、[oi] が [we] となった後、[ɛ] と [we] の読みが共存することになる。そして16世紀から18世紀にかけて、[we] の発音は [wa] に変化する一方、[ɛ] の読みの oi の綴り字は ai の綴り字に吸収されるのである。したがって、韓国語の ㅓ の読みと ㅓ の読みは、開口度が異なるものの ([e] と [ɛ])、フランス語が経験したものなのである。

さらに、韓国語の発音の変化は極めて激しく、フランス語のその比ではないが、なかにはフランス語の音の変化と同種のものもみられる。たとえば, ㅓ (値段) は単独で [ka<sup>p</sup>] であり, ㅓ は発音されない。しかし, たとえば母音で始まる助詞 이 をつけて ㅓ이 (値段が) とすると, 発音は [kapʃi] となり, ㅓ が発音されることになる。これは, まさにフランス語のリエゾンに相当する。たとえば, Ils parlent (彼らは話す) の発音は [ilparl] であり, Ils の s は発音されない。しかし, Ils ont (彼らは持つ) の場合の発音は [ilzɔ̃], すなわち s が発音されることになる。このほか, 例ははぶくが, フランス語におけるアンシェヌマンという現象などを連想させる音の変化が韓国語にみられる。

ここで, 取り上げたいと思うのはこのような類似点から得たヒントをもとに, 上記の例に挙げた ㅓ に見られるような, 音節末の複子音字 (以下, ㄹ받침) の読みの問題である。

## 文字の構成と ㄹ받침

韓国語は字母を組み合わせて文字を作り, 各文字は1音節をなし, その構造は「初声+

中声」または「初声+中声+終声」となる（初声と終声は子音字で，中声は母音字。なお，母音で始まる場合は，子音ゼロの印として初声の位置に子音字○を置く）。具体的には次のように構成される（C：子音字，V：母音字）。

文字の構成とその具体例

CV	가	$\underset{C}{\underset{V}{\text{C}}}$	고	CVV	개	$\underset{V}{\text{CV}}$	괴	$\underset{V}{\text{CVV}}$	괘
CCV	까	$\underset{V}{\text{CC}}$	꼬	CCVV	깨	$\underset{V}{\text{CCV}}$	괴	$\underset{V}{\text{CCVV}}$	괘
$\underset{C}{\text{CV}}$	각	$\underset{C}{\text{CV}}$	곡	$\underset{C}{\text{CVV}}$	객	$\underset{C}{\text{CV}}$	관	$\underset{C}{\text{CVV}}$	관
$\underset{C}{\text{CCV}}$	깅	$\underset{C}{\text{CCV}}$	깅	$\underset{C}{\text{CCVV}}$	깅	$\underset{C}{\text{CCV}}$	깅		
$\underset{CC}{\text{CV}}$	닭	$\underset{CC}{\text{CV}}$	닭	$\underset{CC}{\text{CVV}}$	닭	$\underset{CC}{\text{CV}}$	닭	$\underset{CC}{\text{CVV}}$	닭
$\underset{CC}{\text{CCV}}$	깅	$\underset{CC}{\text{CCV}}$	깅	$\underset{CC}{\text{CCVV}}$	깅	$\underset{CC}{\text{CCV}}$	깅		

（『コスモス朝和辞典』より<sup>2)</sup>）

まず，次のことに注意しておきたい。初声がCCとなる場合，現代韓国語では同一の子音字が置かれ，その構成は次の5通りである。

ㄱ ㄷ ㅌ ㅍ ㅈ

これらは，一つの濃音を表しており，たとえばㄱの発音は [ʔk] である。なお，中世韓国語や近代韓国語では，ㅈなどのように異なる子音字が初声に併置される綴りもあったが（合用並書），その場合でも一つの音を，すなわちたとえばㅈであれば濃音 [ʔp] という一つの音を表していたとされる<sup>3)</sup>。要するに，文字単位で音声面から見れば，初声にくる子音は一つで，二つあるいはそれ以上の子音はこないということになる。

次に，終声がCCとなる場合（CCCと子音字が三つ連続することはないということにも注意を促しておきたい）であるが，具体的には次のような構成になる。

ㄱ ㄷ ㅌ ㅍ ㅈ ㅊ ㅋ ㆁ ㄷㅇ ㅌㅇ ㅍㅇ ㅈㅇ ㅊㅇ ㅋㅇ ㆁㅇ

このうち，同じ子音字が並ぶ時には一つの音を表しており，ㄱは内破音 [k] の音を，ㅈは内破音 [ʔ] の音を表す。ただし，これらの子音字で終る文字に母音で始まる文字が続けば，それぞれ連音して [ʔk] [ʔs] と濃音で発音される。

問題は，異なる二つの子音字が終声にくる場合（ㄷㅌㅈ）である。単独でその文字（音節）のみを発音する時には，その二つの子音字のうち一つしか発音されない。たとえば動詞읽다（読む）の語幹읽は [ik] と発音され，ㅇの文字は読まれない。この語幹に子音で始まる語尾がついた場合も同じで，基本形읽다は [ikʔta] である。しかし，この語幹に母音で始ま

る語尾がつけばㄷも発音され、たとえば連用形읽어は [ilgo] となる。名詞の場合も同様で、単に「鶏」は닭 [tak] であるが、助詞をつけて「鶏が」とすると닭이 [talgi] となる。

この現象については、通常、少なくとも韓国語の教科書や学習書では子音と母音の間で起こる連音の現象とからませて説明されている。すなわち、次に母音で始まる語尾や助詞がつけば、二つ目の子音字が次にくる母音に連音するので（上述の닭이の場合であれば、닭+기となる）、単独では発音されないもう一つの子音字も読まれるようになるといった説明である。この説明は、分かりやすい説明ではある。しかし、学習者は間もなくつまづくことになる。

たとえば、上記の語幹읽に用言を名詞化したり名詞節を作る語尾기をつけた읽기의発音は [il<sup>h</sup>ki] である。また、その語幹に使役あるいは受動を作る接尾辞히をつけた읽히다（読ませる、読まれる）の発音は [ilk<sup>h</sup>ida] である。母音が後続したわけではないのに、ㄷも発音されるではないか。あるいは、앉다 ([an<sup>h</sup>ta] 座る) の語幹앉 [an] にやはり히をつけた앉히다（座らせる）の発音は [ant<sup>h</sup>ida] である。母音が後続しているわけではないのに、ㄷも読まれているではないか。いったい、들받침の読み方はどうなっているのか。

韓国語をまじめに勉強すればするほど、学習者はこのような疑問を持つのではないだろうか。少なくとも筆者はそうであった。なんとかもっとすっきりと整理できないのか。そこで思い当たったのが、フランス語における三子音の法則である。

## フランス語における三子音の法則

まず、フランス語文法でいう「三子音の法則」とはどんなものか、簡単に説明しておきたい。

これは、「不安定なe」(e instable) と呼ばれるeの文字の発音に関係したものである。綴り字記号(˘)のつかないeの読みは[無音] [ə] [e] [ɛ] の四通りに分かれる<sup>4</sup>。まず、この文字が語末にある場合には、[ə] と発音されるle, deなどの単音節語を除いて無音である。語中にある場合には、大ざっぱに言えば開音節中では[無音] または [ə]、閉音節中では[e] または [ɛ] となる。問題は[無音] または [ə] と発音されるeである。

たとえば、petit（小さい）は単独では [pti] でeは発音されない。それに対して appartement（アパートマン、住居）の発音は [apartəmã] で、tの後のeが [ə] と読まれる。この二つの単語でのeの読みの違いは、appartementの場合、問題のeを発音しないと [rtm] という三つの子音が連続するという点にある。petitの場合は、eを発音しなくても子音の連続は二つどまりである。つまり、eを [ə] と発音しなくても子音が三つ連続しなければ発音されず、そうでなければ発音することによって子音が三つ連続することを避けるので

ある。これが三子音の法則である。

なお、この法則は文中の単語間でも適用される。上に、「petit (小さい) は単独では [pti] でeは発音されない」と、「単独では」という断り書きを入れた。単語間の関係でeが [ə] と発音されることもあるからである。簡単な例を挙げよう。petite voiture (小さな車) に定冠詞la [la] をつけたla petite voitureの場合の発音は [laptitvwaty:r] であり、問題のeは無音である。しかし、不定冠詞une [yn] をつけてune petite voitureとすると発音は [ynpətitvwaty:r] となり、問題のeは [ə] と発音されることになる。これは、発音されないと [npt] という三つの子音の連続が起こるからである。

念のために付け加えておくと、この三子音の法則はあくまでeの文字に関するもので、フランス語では子音が三つつながることはない、ということではない。たとえば、texte (テキスト) は [tekst] で、[kst] と三つの子音が連続し、expliquerは [eksplike] であるから、[kspl] と四つの子音がつながることになる。単語間にわたる連続ということになれば、たとえば Il prend du café. (彼はコーヒーを飲む) の主語と動詞 (Il prend) の発音は [ilprɑ̃] であるから、[lpr] と三つの子音が連続している。このような次第であるから、三子音の法則があるといっても、フランス語では子音が三つあるいはそれ以上つながる例は無数にあることになる<sup>5</sup>。

## 韓国語における三子音の法則

上に述べた、三子音の法則を援用して韓国語における들받침の読みについて整理しよう。単独では用いられることのない用言の語幹の場合と、単独で用いられることのある体言の場合とに分けて考察することにする。

まず、用言の語幹の場合であるが、上で읽다と앉다の語幹に子音字で始まる語尾が付いた場合にも通常は読まれない文字が発音される例を挙げた。一般化すれば、語幹の들받침がㅍ, ㅌ, ㅈの場合に, ㅎ (ヴォイス接尾辞) が後続すれば通常は読まれない文字も読まれるのであり、さらにㄷについてはㅍで始まる語尾が後続した場合にも同様のことが起こるのである。また、上では例を挙げなかったが、語幹の들받침がㅍ, ㅌの場合には子音字ㅍ, ㅌ, ㅈで始まる語尾が付けばㅎも発音される。それぞれについて改めて例を挙げることにする。

- (1) 읽다 [ikʰta] : (a) 읽어 [ilgo]      (b) 읽히다 [ilkʰida]      (c) 읽기 [ilʰki]  
 (2) 앉다 [anʰta] : (a) 앉아 [andʒa]      (b) 앉히다 [antʰida]      (c) 앉기 [anʰki]  
 (3) 읽다 [iltʰa] : (a) 읽어 [iro]      (b) -      (c) 읽기 [ilkʰi]

以上の例をよく眺めれば、(3) の (a) を除いて、語幹と語尾との間での子音の連続はす

べて二つであることに気づく。まず、(1) (2) について見れば、母音が後続する場合 (a) には子音字を二つとも読んでも、それらの前 (中声) は必ず母音であるから、当然ながら子音の連続は二つどまりである。(1) でゝあるいはㄱが後続した場合 (b と c) にㄷを讀んでも子音が三つ連続することにならないのは、語幹末尾のㄱと語尾の初声のゝあるいはㄱが重なって、一つの激音 [kʰ] あるいは濃音 [ʔk] になり、また後続のゝあるいはㄱの後には必ず母音がくるからである。(2) の (b) も同様で、ㅍを讀んでもゝが後続するために [tʰ] という一つの激音になり、やはり子音の連続は二つどまりである。둘받침の二つ目にゝがくる (3) の基本形 잃다 (失う) と (c) の場合も同じことで、ㄷもゝも読まれていながら、ゝとㄷあるいはㄱで一つの激音 [tʰ] [kʰ] になるため、子音が三つ連続することにはならない。

ここで、問題は (3) の (a) である。母音が後続しているにもかかわらず読まれているのはㄷのみでゝは読まれていない。これは終声がゝの場合、母音または有声音が後続すれば無音化することによるのであり、[無音] で読んでいると見なすことができよう。

したがって、こう考えられないであろうか。語幹が字母の異なる二つの子音字で終わっている場合、後続する語尾が母音で始まっていようと子音で始まっていようと、子音が三つ連続しなければ二つとも読まれるのであると。これは、二つとも発音すると子音が三つ連続することになる場合には、一つの子音は発音されない、と言い換えることができる (二つのうちどちらが発音されないのかという問題は別にして)。つまり、三子音の法則である。フランス語では e を読むことによって子音が三つ連続することを避けるのに対し、韓国語では子音字を一つ読まないことによって子音が三つ連続することを避けていると見ることができる。

では、体言の場合はどうか。助詞がつく場合には用言の語幹の場合と同様である。つまり、子音が三つ連続しなければ二つの子音字とも読まれる。ただし、用言の語幹の場合と異なり、ㅁ, ㅂ, ㅅで終る体言にㅅ하のようなゝで始まる助詞が付いても、もうひとつの子音字は読まれない。たとえば 닭하고 (鶏と) を [talkʰago] と発音しても子音が三つ連続することがないにもかかわらず、そうは発音されず [taʰkʰago] である。これは、おそらく、合成語においては単独で発音される時の終声維持されること、たとえば 닭과 고기 (肉) の合成名詞 닭고기 (鶏肉) が [talʰkogi] ではなく [taʰkʰogi] と発音されることとの関係で検討すべきものであろう。ここでは、とりあえず、名詞に助詞がつく場合に子音が三つ連続することがないということを確認しておけば、それで充分である。

ところで、用言の語幹とは違って、体言は単独でも用いられる。たとえば、単に「鶏!」と叫ぶ場合、닭을 [talʰk] と発音しても子音が三つ連続することはない。しかし、そうは発音されない。[taʰk] である。なぜか。必ずなんらかの語尾がつく用言の語幹とは異なり、体

言は独立性が強く、たとえば 닭 두 마리 (鶏2羽) や 닭 샀어요? (鶏買いましたか) のように助詞を介さずとも他の体言や用言と結びつきうる。そこで、次のように考えられないだろうか。

体言に助詞がつかず単独で用いられる場合、次に子音で始まる単語がきたとしても子音の連続が三つになることを、あらかじめ防止しているのであると。もし 닭을 [tal<sup>k</sup>] と発話したうえで 두 마리とか 샀어요? とかを付け加えることになれば、닭と後続する単語との間で子音が三つ連続してしまうことになる。体言は独立性が強い、ということは後続する単語についての予見性が低いということである。たとえば, 닭! (鶏!) と瞬間的に叫んだ後, 저기! (あそこ!) と付け加えることもありうるのである。もし, 닭을 [tal<sup>k</sup>] と発音すると後続の 저기의 初声 [tj] とが重なって子音が三つ連続してしまうことになる。このために、体言が助詞なしに用いられる時にも, 들받침の子音字は一つしか読まれないのだとみなすことができる。

かくして、韓国語では子音が三つ連続することはまったくありえないことになる。用言につく語尾や、体言につく助詞に子音二つで始まるものがあれば別だが、そのようなものはなく、また独立した単語にもそのようなものはないからである。韓国語は、徹底して子音の連続を二つにおさえる言語、言い換えれば徹底して子音が三つ連続することを避けている言語である。「避けている」というのは、潜在的には子音が三つ連続する可能性を持っているからである。たとえば, 닭이 (鶏が), 닭은 (鶏は) といった場合は [talgi] [talgun] とㄷもㅂも読まれるのであるから, 닭을 [tal<sup>k</sup>] と発音してもおかしくない。しかし、その場合に後続する単語が子音で始まっていれば、たちどころに子音三つの連続が生じてしまう。そのような潜在的な可能性を持ちながら、それを避けているからこそ、三子音の法則であると言っているのである。

## おわりに

以上、ごく大ざっぱに、韓国語を支配している三子音の法則をみた。フランス語の場合には三子音の法則はごく一部分の現象にすぎない。それに対して、韓国語では三子音の法則が全面的に貫徹している。これは、韓国語の音声面での大きな特徴であろう。

ところで、付け加えれば、日本語の場合も子音が三つ連続することはない。しかし、韓国語と違って日本語にはそもそも子音が三つ連続する潜在的な可能性がない(子音二つで始まる音節も、子音二つで終わる音節もないから)。したがって、日本語の場合は子音が三つ連続することを避けているわけではなく、三子音の法則とは無関係である。韓国語と日本語は、文法的にはよく似ている一方で音声面では非常に異なるが、もっとも大きな相違

点はこの点にあると言いうるかもしれない。

もちろん、本稿で述べたのは厳密性に欠ける簡単な素描にすぎない。また、韓国語学の専門家から見れば、邪道もはなはだしい思いつきに過ぎないと言われるかもしれない。そうであるかもしれないが、少なくとも、フランス語文法でいう三子音の法則の概念を援用することで、韓国語の音声面における特徴のひとつが鮮明になることは間違いないと思う。

## 注

- 1 これは日本語にも見られる。たとえば、「うまい」が「うめー」と発音されるなど。
- 2 菅野裕臣・他『コスモス朝和辞典（第2版）』白水社，1997（1991），p. 985。
- 3 金鐘埴・他『韓国語の歴史』대한교과서，1998，p. 181-184およびp. 248-250参照。なお，中世韓国語では，ㄴㅇのように三つの子音字が並んだものもあるが，やはり一つの音を表していた。ただし，同書によると，これらの子音字がそれぞれの音価で発音されていたという主張も提起されてはいるという（p. 182）。
- 4 e+n, e+mで鼻母音になる場合や，ei, eu等のような複母音字は別である。
- 5 このように子音が三つあるいはそれ以上連続するという現象は，フランス語だけでなくヨーロッパ言語で広く見られるであろう。